

廣津和郎全集

広津和郎全集 第四卷

定価三五〇〇円

昭和四十八年十一月十日印刷
昭和四十八年十一月二十日発行

著者 広津和郎

発行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

発行者 中央公論社

東京都中央区京橋二一
電話（五六一）五九二一

振替東京三四

広津和郎全集

第四卷

目次

二人の不幸者

七

若き日

一〇〇

青桐

一〇八

薄暮の都会

三六

あとがき

小說
四

二人の不幸者

一

つい先日まで田圃や畑であったところに、二三日地ならしの「よいこらさあ！」と尾を細く長く引っぱった哀しげな歌を歌いながら、数人の土方が立働いていたかと思うと、もう直ぐに何処からか、節穴だらけの安板だの、火事場の焼残りか、精々取毀ち家屋からの二度づとめと思われる、黒く煤んだ材木だのが撥ばれて来て、何の順序もなく、雑然と無遠慮にどしどし建てられて行ってしまうような、そうした近頃東京の郊外にざらに見かける、粗造長屋のひとつであった。

押川と蠣崎とが、東京の山の手から、そこに移転して来たのは、三月の半ばであった。――移転したと云うよりも、寧ろ、蠣崎がその時友人達に送った転居の通知の文句を借りれ

ば、「とうとうこんな処に追い込まれた」と云うのがほんとうであった。

家の前の往来は昔の街道筋のひとつで、東京から目黒、碑衾を通って、やがて多摩川の二子の渡を渡れば、遠く相模の大山の方へまでも通じているのだそうである。その街道を朝は未だ薄暗い中から、沢山の荷車や荷馬車が、肥やら野菜やらを満載して、田舎から都会の方へと、陸續として通って行った。そしてそれ等の車が、土台のしっかりしていない安家屋に、まるで地震のような烈しい震動を与えた。

「えゝ糞ッ！ また眼が覚めてしまった！」

その震動に朝っぱらから睡眠を妨げられるのが、毎夜一時から二時頃まで机に向って起きている習慣のついた蠣崎には、堪えがたい不快であり苦しみであった。神経質な彼は、欄干が破裂しそりに苛ついて、仰向けになつたまゝ、氣を鎮めようと天井を見つめていると、ひっきりなしにごろりごろりと

妙に欄にさわる地響を立てながら、時々小砂利に車輪が軋る、かちやり、ごつんと云う固い音を交えたり、かと思うと急に突拍子もない甲高い馬子歌がそれに加わったりして、遠くの方から次第々々に近づいて来ては、家の前を通り過ぎて、そしてかなり遠ざかつて行くまで、遠雷のようにひびいている。そしてそれが聞えなくなってしまう時分には、又新しい車が、遠くの方から再び同じ響を新たにひびかせ始めるのである。——そしてそれが過ぎると、又更にその次のがやって来る。そして更に更にその次のが……

こうして遠くの方から前触の響を立てながら、次々に続いて来る車の一つ一つが家に与える震動を、蠣崎は電の光った後で雷鳴を待つような、慄えた、息苦しい心持で待つのであった。心音に別段何の異常もないが、併し何かの知られざる原因から、やゝもすると直ぐに心悸亢進を始める、あの近頃になって益々増えて来る「神経性心臓病」と仮に命名された患者のひとりであった彼は、震動の予覚が次第に迫って来るにつれて、脈搏が急激に増加して来るのを覚えた。

「あゝ、あゝ！」と蠣崎は大きな溜息をひとつとして、彼のいつもの癖である、殆んど無意識のうちに右の手の掌を心臓の上に当てがって、心悸の調子を調べながら、自分達は何と云う不快な家に住まっていなければならないのだらうと云う事を、考え始めるのであった。

彼は三年前から小説を書き始めて、今までに十数篇の短篇小説を世間に発表していた。その一篇々々が極めて短いものばかりで、それによって得た金を全部合算して見ても、僅に二百円を少しばかり越しているに過ぎなかった。——だが、彼はその外に翻譯を一二冊やっていた。その金の方が創作で得た金よりも寧ろ多い位であったが、それでも翻譯と創作との両方を合せて、一ヶ月平均二十円にも達してはいなかった。「一ヶ月に二十円……どんな貧弱な労働者だとして、今時これより少い金を取る事はあるまい。それで一体俺はどんな風にしていたらう？」

その三年の間に、東京の山の手の安下宿から安下宿にと、絶えず、彼は移って歩いた。そして二度ほどおいたてを食った。……だが、そうした中にも、彼が今でも忘れられないのは、山の手の或川の縁にある小さな下宿屋の瘠せ細った五十五六のおかみであった。そのおかみは色が青白くて、呼吸器の悪そうな淋しい顔をして、絶えずごほんごほん軽い咳をしていたが、それでも今時にめずらしい親切者であった。

彼の生活が例に依って窮迫の極に達して、宿料の滞りも何ヶ月かに及んだ時、

「蠣崎さん、あなたは決して踏み倒すような不真面目な方じゃありません。それはよく存じて居ります。ですけれども、この通りの小さな家で、僅ばかりのお客さまを相手にやって

行かなければならないのですから……」

こんな風にさも云いにくそうにおかみは切り出した。その云うところは如何にも尤もに違いなかった。彼はこうした穩かなおいたでは食った事がなかった。だから、自分の貧乏を天地に向つて恥ずる必要がないと考えていた彼も、此理解のあるおかみの言草に対しては、つくづく金のない事が恥しくも濟まなくも思われたのであった。

「それで甚だ申訳ありませんけれど」とおかみは言葉をつづけた。「そんな具合で何ですから、どうぞ今までの宿料はお出来になりました時頂く事に致しまして……いえ、いつでも宜しゅうございます。なに、証文ですって？ まあ、そんなものは決して頂かなくとも宜しゅうございますから」

おかみはこの最後の日の昼飯に、まるで遠い旅に出かける彼を見送りでもするように、わざわざ鯛の頭付などを自分で持つて来て、彼を慰めたり、この世間に身を処して行く上の忠告を与えたりした。蠣崎はおかみが部屋から出て行く後姿を見ていると、實際眼に涙が浮んで来るような気がした。

「よし、これからはうんと書いて、此借金を返しに来なければならぬ」そんな風に思いながら、自分の荷物をいろいろと調べて見て、そしてとうとう死んだ彼の兄が外国から買つて来て呉れた、彼の持物としては少しく上等過ぎる置時計を一つ選り出して、せめてもの宿料のかたに、それを残して行

きたいと云う事を、おかみに申し出た。

「まあ、そんな御心配には及びませんよ」おかみは、赤い顔をして、もじもじしている彼を見て笑いながら、「お時計がないとこれから不自由ですよ。それに他の下宿にお移りになるにしても、持つてらしやるものゝ中に、何か目星いものがありますんじや、体裁が悪うござんすからね」

——そんな具合で、彼の唯一の財産とも云うべきその時計は、今でも尚、彼の枕許の机の上に、ちくたく音を立てながら、針を動かしている事を許されているのであった。——

出来るだけ空間を儉約して建てゝあるために、南と東とが全部ふさがっているの、家の中が光線の通りが悪くて薄暗いものだから、天井の中央に大きな四角形の息抜穴見たような凹みが出来ていて、そして、その底に一尺四方ばかりの硝子のはめ込んであった。晴れた晩にはそこからきらきら輝いている星が見えた。この思案を凝らした明り窓から、真昼には太陽が二人の青年の見すばらしい部屋の中を、遠慮もなく覗き込んだ。日が暮れるのも夜が明けるのも、その硝子越しの空の色の濃淡から、坐ながらにして解るのであった。

「あゝ、もう大分明るくなったな」蠣崎は白くなった明り窓を仰ぎながら、こう独語ちて、例の時計を見ると、丁度六時半であった。そこで、

「おい、押川君、もう起きないか」と傍らにまるで蒲団に獅

噛みつくように身体を縮こまらして寝ている押川に声をかけた。押川は画家などによくあるように、髪の毛を長く延ばしていた。そして少し口を開け加減にして、まるで何ものかに脅かされてゐるように、眉の辺に弱々しい、臆病な色を浮べながら、死んだように寐くさっていた。その輪廓は鼻梁が整って、殊に鼻などは、少し大き過ぎはするが、日本人にしてはかなり高い方なので、彼の顔全体を立派なものにして見せていたのであったが、併しそうした輪廓としては男性的な立派さを持ちながら、全体としての感じから云うと、疲れて、へなへなになって、活気と云うものが少しも表れていなかった。蠣崎が夜明けの薄明りにぼうつと浮んで見えるその押川の顔を見ると、何とはなしに「哀れな男」と云う気がして来るのであった。

「おい、もう起きないか。社に行くのが遅れるぞ」

「うゝ」と呻き声を発しながら、押川は眼をさまして、「もう何時だい？」

「六時半だよ」

「そりゃ大変だ」と勢よく半身を寢床の上に擡げたが、併しそれから着物を着更えるのにかなり手間取った。非常に寒がりの押川には、三月半ばの気候でも、尚ばっと一時に寝間着を脱いで、冷たいシャツを肌に着けるのには、余りに寒過ぎた。彼は先ず片手だけをそつと寝間着から出しては、「おゝ

寒い」そう云って、シャツの袖に突っ込み、それから又暫くしてもう一つの手を出して、「おゝ寒い」と再び云いながら、それを又片方の袖に突っ込み、そして今度は夜具の中から両足を出して立上るまで、尚暫くの時間を要するのであった。

二

蠣崎はその頃一つの短篇小説を書こうと努力していた。彼は押川が社に出て行くと、毎朝直ぐに机を例の明り窓の下に持ち出して、原稿用紙に向ってペンを握るのであったが、併し心におちつきがなく、気ばかりあせて、結局書いては消し、書いては消して、いたずらに書き損いの反故を丸めては、頭を苛立たせるに過ぎなかった。

「あゝ、俺の頭は何だつてこんなに落ちつかないだろう？……おちつきたい、おちつきたい！」彼はペンを投出して、両手で頭を押えながら呟いた。そして彼は自分自身の今まで過ぎて来たこの人生のいろいろな事を考えて見るのであったが、併しそれが何の変化も、何の色彩もない単調無味なものに思われて来るのであった。——彼が中学を卒業した年に、彼の父と母とは相前後して郷里で死んでしまった。彼には兄弟と云つては、十歳ほど年長の兄がひとりあって、亜米利加

に行つて牧畜か何かをやつて、多少の金を作つて来たので、彼がW——大学の文科に通つてゐる頃は、その兄が学費を出してゐて呉れたのであつたが、その兄も彼がW——大学の三年の時に、急に病氣になつて死んでしまつた。

そこで彼は此世の中にたつたひとりっきりの孤独な身となつてしまつたのである。

「そうだ、俺は全くのひとりぼっちだ、俺には何も無い！」と彼は考えた。「親父でも母でも生きてゐて呉れたら、あの兄貴が生きてゐて呉れたら……」

すると彼の頭には、彼と同じ学校出で近頃新しく文壇に現れて来たMと云う作家の事が浮んで来た。Mはたった一人のその母親を常に大切にしていた。そしてその母親に対する優しい子供の愛を書いた作によつて、近頃かなりの評判を得ていた。

「何よりも一番悪いのは、俺に何等の負担のない事だ！」と蠣崎は自分の肩を見返るような氣持になつて再び呟いた。

「俺の肩はあんまり軽過ぎる。俺には背負うべき何ものもない。……あゝ、若しあのMのように、俺が面倒を見てやらなければならぬ母親でもあつたならば、屹度此氣持がもつともっと緊張して来るに違ひない。……俺は余りひとりぼっちだ。あゝ、負担が欲しい、負担が欲しい！」

実際蠣崎には此世の中の隅から隅までを探して見ても、負

担と云うものが一つもないのであつた。彼故に存在し彼を頼りに生存してゐる人間などは、一人もいないのであつた。

「俺が小説が書けないのは、つまり此負担がないからだ。たとい困つても、俺は自分一人だけ困ればよいのだと思うものだから、困つた氣持を徹底的に味う事が出来ないでしよう。又喜びにしたところが、俺に肉身があつて、その喜びを共にして呉れたなら、尚一層その味が深くなるに違ひない……」ところが、俺にはそう云うものが何もない」

彼はこうしてそれが自分の創作の出来ない理由であるかのように考へて行く中に、一種の自己弁解の安慰を感じて来た。そして負担の余り多過ぎる人間が、その事を以て自分の仕事の出来ない弁解とするのと丁度同じように、彼は自分が創作の出来ないのは自分の罪ではなく、自分に負担を与えないやうにした何者かの罪であると云つたやうな氣持になり始めるのであつた。そしてその何者かに向つて当り散らしてやりたやうな焦燥をおぼえた。

ところがその氣持がひと度ひっくり返ると、今度は自分の無力をまともから見つめなければならぬ苦しさから、妙に投げやりな、嘲笑的な氣持が襲つて来た。「そうだ、よく批評家共の云うように、学校を出たばかりで、直ぐに小説を書く事ばかりに苦心したところで、何で此社会が解るものか……その通りだ。俺は一体この世の中の何を知つてゐる？」

こんな風に思われて来た。そして仰向けに転がって、明り窓から直接に落ちて来る光線が眩しいものだから、側にあった新聞紙を眼の上に載せながら、尚も考えつづけて行つた。

「一体俺は何を知っている？　こうして都会から追われて、郊外の馬小舎見たようなところに這入り込んで、そしてそれが真実な生活だなど、自惚れかけている俺に、一体何が解っている？……俺にはひとりの女さえ自信を持つては書き表す事が出来ないではないか！」

それは全く正直なところでもあった。彼は一人の女さえも、それが如何なる感情を持つているか、如何なる性質を持つているか、実際に知つてはいないのであった。

「俺は未だ一度も恋をした事がない！」と蠣崎は堪らなそうに舌打して呟いた。「もうこの世の中に三十年近くも生きていながら、俺は未だひとりの女をも手に入れた事はないのだ！」

此恋とか女とか云う考は、蠣崎の頬にいつも子供のように恥しそうな赤い色を散らさせないでは置かなかつた。——彼は学生時分から、或友人達に誘われるがまゝに、恋を売る種類の女には接した事があるので、勿論童貞ではなかつた。けれども、娘と云うものに対しては、彼は何かそれが厭かな、神聖なものゝように考えられてならないのであつた。——そして孤独な、窮迫したそう云う生活を送つていながらも、始

終何か靈魂のどん底から彼を揺り動かさないでは置かないような、ロマンティックな恍惚境を空想しているのであつた。

「俺が恋をすれば……」こう彼はよく考える事があつた。

「そうすれば俺の總ての不幸は屹度消え去るに違いない。俺のひねくれた、曲つた魂が、真直に、素直に、のびのびと成長して行くに違いない……」

それなら、その恋が何処に行つたら、いつになつたら、そしてどうしたら得られるか？　それは彼には一切解らなかつた。彼の周囲には、彼の所謂神聖な、厳肅な処女に接近する手がかりは一つもなかつた。彼は東京の上流、中流の家庭と云うものを一つも知らなかつた。彼は四五人の友達を考えたが、それ等の友人達が、生憎ひとりとして妹を持つていなかった。

三

今から十四五年前に流行した、胸に二列にボタンのついている、ふりの下から着物の袖が一尺も出るような、薄茶色の旧式なトンビを引つ被りながら、区役所の書記と云つたような恰好をして、××社の扉のハンドルに内から手をかけると、「あゝ、今日もやっとこれで終つた！」と云うはつとした気

持が、押川の胸の中に溢れて来た。一体元氣のないものごしをする彼が、その時ばかりは割合に活潑に、どしんと音を立て、後に扉を押し閉めて、人造石のステップを二三段下りると、往来にはもう初春の夕暮が迫っていた。沈みかけた太陽が西の空に真赤に、併し淋しく力なげに燃えて、電柱だの、何処かの西洋館の避雷針だの、増上寺の杉の森の尖端や五重の塔の頂^{タカ}辺だのが、際立って色濃くその空に突っ立っていた。××社の細い横丁を出ると、そこは直ぐ電車通になっていた。けれども、停留場まで行くためには、その線路に沿って一丁近くも歩かなければならなかった。その一丁ばかりの間を首垂加減にして歩いて行く時、押川の頭には殆んど何時でも同じ考が浮んで来るのであった。それは丁度両側に並んでいるいろいろな商店の看板やら電柱やらが始終同じであるように、と云うよりも寧ろ、同じ看板や電柱を見ながら考え考えした事がいつの間にか、今度は同じその電柱や看板を見ると、直ぐそこに一種の聯想作用を生じて、そしてその同じ考が浮んで来ると云った方がほんとうであるかのように、いつでも、まるで版に捺したように同じなのであった。

「あゝこうして毎日々々暮していて何になる？」——それは考と云うよりも、殆んど身体と心との全体から絞り出される一種の溜息に似た気分であった。彼は頭の中があとと云うような、何とも取止めない響が、つまっているような気がした。

彼はそれ以上考えようとするには氣力が足りなかった。

押川は此人生と云うものに対して、それがたとい如何なるものであれ——幸福なものであれ、不幸なものであれ、光明に充ちたものであれ、或は暗い絶望に充たされたものであれ——兎に角、彼自身の見て行くものに依つて、自然と心の中に生ぜしめられるべき一種の生活傾向が、そろそろ出来上らなければならぬ年頃であった。彼は三十と云う声を既に二三年前に聞いた。彼と同年配の周囲の人間を見渡して見ても、もう大概はそれぞれの仕方に於いて、何等かのおさまり、何等かのかたづきを持っていた。同期に中学を卒業した中にも、もう若手の評判の医学士として外国に留学中で、帰朝すれば直ぐ博士号を送られるだろうと噂されている男などもあった。海軍の軍人になっている男はもう少佐になろうとしていた。

——その他数え立てれば際限がないが、それでもそれ等の人間の総てが、医学士は医学士並に、軍人は軍人並に、又商店の番頭に住み込んだ男は番頭並に、それぞれ「人生はこう云うものだ」という各自の概念を心の中に育てられていて、そしてそれに従つて行動しているに相違なかった。

ところが、此押川にはそうしたかたづきやおさまりがでんで出来ていなかった。中学を出ると彼は画家になろうと思つて或研究所に通った。彼は割合に小器用だったので、或程度までは直ぐに達したが、併しそれからもう少しも進歩しな

かった。そして彼はやがてそれに倦いて、今度は文学者になるうと思つた。此方面でも彼の小器用さは、直ちに彼に一二篇の短篇小説を書かしめた。彼は四五名の友人と同人雑誌を發行した。自然主義の勃興當時で、彼は艶麗な筆でツルゲエネフ張のものを書いたりした。が、此処でも亦彼はその小器用さで一寸したものを纏める以上には進まなかつた。……彼よりも四つ年下の蠣崎はその当時その同人雑誌の同人中での最年少者なのであつた。その蠣崎は今でもあゝして始終創作に刻苦しているが、押川は長い前からもうそれにも倦いてしまつていた。

「俺は鼻が悪いからだ。こんなに倦きつぽく、こんなに直ぐ疲労してしまふのは、これはみんな蓄膿症のためなのだ！」彼はこんな風に呟いては、よく自己弁解のために、自分の蓄膿症を持ち出したが、併しそれは医者にかゝつたり、手術を要したりする程大したものではないのであつた。

だが、唯ひとつ押川は蠣崎と違つて、過去に於いて女性に対する経験をかなり豊富に持つていた。今は彼の顔附も大分老いぼれたが、未だ親がかりで、今のような旧式な外套にやつと寒さを凌いでいるにも当らなかつた二十四五の時分には、男から見ると軽くて甘過ぎるが、女から見ると何となく親しみ易く近づき易い、綺麗な優しい男であつた。彼は女から恋された。こつちからも恋した。と云うよりも、実際に恋愛な

どと呼び得べき感情を経験する前に、早くも関係してしまふのであつた。そうして関係した女がかなり数多かつた。或女とは墮落までもした。ところが、女は暫くすると彼を捨てゝ、実家に逃げ歸つて、そして他の男のところに嫁いでしまつた。取残された彼は、その当座は女を恨んで、口惜しがつて、その家の附近を徘徊したりしたが、やがてその一時の興奮が過ぎ去つてしまふと、割合に暢気であつた。……本心からの執着の余りにない彼は、その事実によつて深い傷手を心に負わなかつたと同時に、又そうした事実のために、持つて生れた感情を満されてしまふような事もなかつた。女を知る前にそう云う事に対して余り潔癖でなかつた彼は、所謂苦勞を重ねても、心を大して汚されはしなかつた。喉もと過ぎれば熱さを忘れる、と云うあの諺のように、彼の苦勞はいつでも上滑りした……

押川が歸つて行つた時、蠣崎は机の上にトランプの札を並べて、ベエシエンスをやつていて、何だか苛立たしそくに、手に持つた札を一枚々開けていたが、

「ちえッ、又駄目か……」と札をそこに投げ出しながら云つた。「今日は三時から続けさまにやつているんだが、一遍も合わないよ。——頭の好い時はよく出来るが、頭が悪いとちつとも合やしない！」

押川は相変らず興味のないような顔をして、それには返事